Gunma-univ. Kobayashi Lab Team RF

> 2014年1月18日(土) 於 早稲田大学

# トランスを用いたデュアルバンドLNAの トリプルバンドLNAへの拡張

神山雅貴\*,興大樹,河内智,高橋伸夫(群馬大学) 馬場清一,壇徹,坂田浩司(三洋半導体) 小林春夫,高井伸和(群馬大学)

アウトライン

- 研究目的
- Dual Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- Triple-Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- 考察

- インダクタ・トランスのレイアウト考察

まとめ

アウトライン

- <u>研究目的</u>
- Dual Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- Triple-Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- 考察

- インダクタ・トランスのレイアウト考察

まとめ

### 研究目的



#### 受信側

低雑音増幅器:Low Noise Amplifier(LNA)

 ・・・後段で処理できるレベルまで、<u>雑音・歪みを付加することなく</u>信号を増幅する (例:集音機、補聴器)

→消費電力は小さいが常に動作(受信信号がいつ来るかわからため)

送信側

電力増幅器:Power Amplifier(PA)

・・・できるだけ大きな電力にして信号をアンテナから送信する(例:拡声器)
→消費電力は大きいが送信時のみ動作

### 研究目的



受信側

低雑音増幅器:Low Noise Amplifier(LNA)

・・・後段で処理できるレベルまで、<u>雑音・歪みを付加することなく</u>信号を増幅する

なぜ低雑音で信号を増幅する必要があるのか? アンテナから受信する信号はとても小さい 小さい信号を増幅する過程での雑音・歪みは後段の処理に比べて影響が大きい

### LNAについて



#### LNAにおける雑音の評価(雑音指数:Noise Factor)



雑音指数:Noise Factor(NF)  

$$NF = \frac{S_{in}/N_{in}}{S_{out}/N_{out}} = \frac{S_{in}/N_{in}}{(GS_{in})/N_{out}} = \frac{N_{out}}{GN_{in}} = \frac{GN_{in} + N_{a}}{GN_{in}} = 1 + \frac{N_{a}}{GN_{in}}$$

$$\rightarrow \text{NF} \text{is in Statement in the set of the set$$

解析方法

入力整合・電力利得をみるためにLNAの解析では SP(Scattering Parameter 散乱パラメータ)解析を用いる



SP解析

S<sub>11</sub>・・・入力整合がとれているかを示す 値は小さいほど整合がとれている⇒今回は-15dB程度まで

S<sub>21</sub>・・・電力利得を示す

値は大きいほど利得がある⇒今回は15~20dB程度まで

9/69 インダクティブソースディジェネレーションをもつソース接地型LNA



- LNAの基本的な回路の一つ
- 抵抗を用いない
  - インダクタンスで整合 ⇒抵抗の熱雑音がなくなるため低雑音になる
- ・ 共振周波数でのみ利得がとれる
   ⇒狭帯域のアンプである

10/69 インダクティブソースディジェネレーションをもつソース接地型LNA



- LNAの基本的な回路の一つ
- 抵抗を用いない
  - インダクタンスで整合 ⇒抵抗の熱雑音がなくなるため低雑音になる
- 共振周波数でのみ利得がとれる ⇒狭帯域のアンプである

· 負荷側

負荷のインダクタL<sub>L</sub>と並列のキャパシタCで共振周波数を決定

共振周波数を決定する式:

$$\frac{1}{2\pi\sqrt{L_L\cdot C}}$$

1

共振周波数でのみ利得がとれる

インダクティブソースディジェネレーションをもつソース接地型LNA



11/69

12/69 インダクティブソースディジェネレーションをもつソース接地型LNA





(入力整合) S11解析

#### 複数の帯域をもつLNA

狭帯域を複数もたせるためには







アウトライン

- 研究目的
- Dual Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- Triple-Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- 考察



まとめ

調査論文



IEEE TRANSACTIONS ON CIRCUITS AND SYSTEMS I :REGULAR PAPERS, Vol.59, NO.8, AUGUST, 2012

#### 論文の提案回路



トランスを用いたDual-Band LNA

- *L<sub>G</sub>とL<sub>2</sub>をトランス結合した回路*
- 入力整合側と負荷側の両方で2つの 共振周波数をとれる

#### 論文の提案回路



#### 論文の提案回路





トランス2次側の電流式

①~④式より入力インピーダンス*Z<sub>in</sub>*を求めると

$$Z_{in} = \frac{g_m L_s}{C_{gs}} + j \left\{ \omega (L_g + L_s) - \frac{1}{\omega C_{gs}} + \frac{\omega^3 M^2 C_2}{1 - \omega^2 L_2 C_2} \right\}$$
  
実数 ⇒ R<sub>s</sub>(50Ω)   
虚数 ⇒ 0 0となるωが共振周波数

共振周波数を求めるためには以下の式でのωを求めればよい

$$\omega (L_g + L_s) - \frac{1}{\omega C_{gs}} + \frac{\omega^3 M^2 C_2}{1 - \omega^2 L_2 C_2} = 0$$

$$\omega(L_g + L_s) - \frac{1}{\omega C_{gs}} + \frac{\omega^3 M^2 C_2}{1 - \omega^2 L_2 C_2} = 0$$
整理して

$$\omega^{4} \underbrace{(L_{G}k^{2} - L_{1})}_{L_{G}} C_{gs}L_{2}C_{2} + \omega^{2} \underbrace{(L_{1}C_{gs} + L_{2}C_{2})}_{L_{G}} - 1 = 0$$

$$\omega^2 = W$$
で 解の公式より

$$\begin{split} W &= (\omega^2) \\ &= \frac{L_1 C_{gs} + L_2 C_2 \mp \sqrt{(L_1 C_{gs})^2 + (L_2 C_2)^2 + L_1 C_{gs} L_2 C_2 (4k^2 - 2))}}{2L_1 C_{gs} L_2 C_2 (1 - k^2)} \\ a &= \frac{1}{\sqrt{L_1 C_{gs}}}, \ b = \frac{1}{\sqrt{L_2 C_2}} \ \xi \ \text{SUVC} \\ &= \frac{a^2 + b^2 \mp \sqrt{a^4 + b^4 + a^2 b^2 (4k^2 - 2)}}{2(1 - k^2)} \end{split}$$



23/69

特性比較







#### シミュレーション結果 SP解析





 $R_B = 100 k\Omega$   $L_G = 8.2 nH$   $R_M = 103 \Omega$   $L_L = 1 nH$   $V_B = 0.6 V$   $L_2 = 4 nH$   $C_M = 514 fF$   $C_{block} = 1 nF$   $L_S = 180 pH$   $C_{gs}$ 分として挿入した k = 0.6  $C_2 = 700 fF$ 

理想素子シミュレーション結果



### 共振周波数の理論値

共振周波数を求める式 
$$(Im(Z_{in}) = 0)$$
  
 $\omega^4 (L_g k^2 - L_1) C_{gs} L_2 C_2 + \omega^2 (L_1 C_{gs} + L_2 C_2) - 1 = 0$   
素子値を代入して  
 $L_G = 8.2 \text{nH}$   $C_2 = 700 \text{fF}$   $W = \omega^2$   
 $L_1 = 8.3 \text{nH}$   $C_{gs} = 129.4 \text{fF}$   
 $L_2 = 4 \text{nH}$   $k = 0.6$   
2次方程式  
 $W^2 (-19.8 \times 10^{-43}) + W (3.9 \times 10^{-21}) - 1 = 0$   
 $\omega \text{ICOVC} 解き \omega = 2\pi f \text{O}$ 関係式からfを求めると  
 $f_{Low} = 2.77 \text{ GHz}$   
 $f_{High} = 6.49 \text{ GHz}$   $\leftarrow 9 \text{ID}$ の素子値での理論値

#### 理論値・理想素子・MOSのみTSMC比較



30/69

#### 結合係数k変動 シミュレーション





32/69

#### 結合係数k変動させる







 $f_{High}$ が約2 GHz小さくなるようにシフトしている

NFシミュレーション

高周波回路での実際のインダクタには周波数に応じた抵抗成分がみられる

インダクタのQ値の式  $Q = \frac{2\pi fL}{R}$   $R = \frac{2\pi fL}{Q}$   $-\infty$ 

この式より高周波でのインダクタの抵抗成分が計算できる Dual-Bandでは二つの共振周波数の値を代入する(今回f = 2.5GHz,5GHz) Qの値を入れインダクタの抵抗成分を計算する(Q = 10) 回路上のインダクタに抵抗を入れシミュレーションを行う

 抵抗成分を含めたインダクタでのシミュレーションでNFがどれだけ劣化した か比較する



・NFは値が小さいほどLNAの内部での雑音成分が小さい

NF(Noise Factor)シミュレーション



#### Dual-Band LNA まとめ

38/69

- LNAの入力側にトランスを用い共振周波数を二つにできることを示した
- 提案回路Dual-Band LNAの共振周波数を求める式を解析した
- 理論値と理想素子での結果の値を一致させた
- 理想素子と実素子のFrequency Shift を設計時にどうするかという問題



アウトライン

- 研究目的
- Dual Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- <u>Triple-Band LNA</u>
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- 考察



まとめ

39/69

#### Triple-Band化を考える



トランス2個のLNAの共振周波数を求める式は 6次方程式(共振周波数3つ)になるのではないか

#### Triple-Band LNAの実現方法

#### Triple-Bandが実現できた回路構成は①②である



- $L_G \ge L_2 \ge E > 2$ をトランス結合
- L<sub>G2</sub>とL<sub>3</sub>をトランス結合
- 2次側を経て3次側に結合させる構 成方式
- L<sub>G</sub>とL<sub>2</sub>をトランス結合
- L<sub>G</sub>とL<sub>3</sub>をトランス結合
- 1次側と2次側でのトランス結合を 二つ使う構成方式

41/69

#### Triple-Band LNA①の解析



共振周波数を求めるため $Im(Z_{in}) = 0$ を解く

#### Triple-Band LNA①の解析



 $\omega^{6}C_{gs}C_{2}C_{3}\{(L_{g} + L_{s})(L_{2} + L_{g2})L_{3} - (L_{g} + L_{s})k_{2}^{2}L_{g2}L_{3} - k_{1}^{2}L_{g}L_{2}L_{3}\}$ + $\omega^{4}\{-(L_{g} + L_{s})C_{gs}(L_{2} + L_{g2})C_{2} - (L_{g} + L_{s})C_{gs}L_{3}C_{3} - (L_{2} + L_{g2})C_{2}L_{3}C_{3}$ + $k_{2}^{2}L_{g2}C_{2}L_{3}C_{3} + k_{1}^{2}L_{g}C_{gs}L_{2}C_{2}\}$ 

 $+\omega^{2}\{(L_{g}+L_{s})C_{gs}+(L_{2}+L_{g2})C_{2}+L_{3}C_{3}\}-1=0$ 

#### 共振周波数を求める式は6次方程式(共振周波数3つ)

#### ②の回路解析

共振周波数を求める式は  $(Im(Z_{in}) = 0 n c)$ 

$$\omega (L_g + L_s) - \frac{1}{\omega C_{gs}} + \frac{\omega^3 M_1^2 C_2}{1 - \omega^2 L_2 C_2} + \frac{\omega^3 M_2^2 C_3}{1 - \omega^2 L_3 C_3} = 0$$

 $\omega^{6} \{ (L_{g} + L_{s})C_{gs}L_{2}C_{2}L_{3}C_{3} - k_{1}^{2}L_{g}C_{gs}L_{2}C_{2}L_{3}C_{3} - k_{2}^{2}L_{g}C_{gs}L_{2}C_{2}L_{3}C_{3} \}$ + $\omega^{4} \{ -(L_{g} + L_{s})C_{gs}L_{2}C_{2} - L_{2}C_{2}L_{3}C_{3} - (L_{g} + L_{s})C_{gs}L_{3}C_{3} + k_{1}^{2}L_{g}C_{gs}L_{2}C_{2} + k_{2}^{2}L_{g}C_{gs}L_{3}C_{3} \}$ + $\omega^{2} \{ (L_{g} + L_{s})C_{gs} + L_{2}C_{2} + L_{3}C_{3} \} - 1 = 0$ 

共振周波数を求める式は6次方程式(共振周波数3つ) ①の回路と同様に解析できほぼ同じような式になる





#### シミュレーション結果 SP解析



全部理想素子でのシミュレーション



理想素子シミュレーション結果



共振周波数を求める6次方程式に素子値を代入して  $L_2 = L_{g2} = L_3 = 4$ nH  $L_S = 200$ pH  $L_{C} = 8.2 \text{nH}$  $C_{as} = 194 \mathrm{fF}$  $C_2 = 300 \text{fF}$  $C_{3} = 660 \text{fF}$  $k_1 = k_2 = 0.6$ 3次方程式  $W^{3}(6.66 \times 10^{-63}) + W^{2}(-12.7 \times 10^{-42})$  $+W(6.67 \times 10^{-21}) - 1 = 0$  $\omega$ について解き $\omega = 2\pi f$ の関係式からfを求めると  $f_{Low} = 2.59 \text{ GHz}$  $f_{Mid} = 3.50 \text{ GHz} \quad \leftarrow 今回の素子値での理論値$  $f_{High} = 5.41 \text{ GHz}$ 



50/69

#### 結合係数k変動 シミュレーション



## 理論値・理想素子・MOSのみTSMCのk変動比較

52/69



## 理論値・理想素子・MOSのみTSMCのk変動比較

53/69



#### 結合係数k変動 比較



#### k変動比較(MOSのみTSMC入れ替え)



NF(Noise Factor)シミュレーション



NF(Noise Factor)シミュレーション



・NFは値が小さいほどLNAの内部での雑音成分が小さい

アウトライン

- 研究目的
- Dual Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- Triple-Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- <u>考察</u>

- インダクタ・トランスのレイアウト考察

まとめ

チップ上でのインダクタ・トランスの実現



最上層の配線は太 い場合が多い

チップ上でインダクタを実現する場合 Q値が高くなるように最上層で作成する

- Q値が高いほどインダクタの抵抗成 分が低くなる
- 低雑音増幅器LNAでは雑音の原因 になる抵抗は少なくしたい
- トランスはインダクタを組み合わせて 作成される
  - 最上層でのレイアウトにエ夫が必要

LSIの 断 面 図

http://techon.nikkeibp.co.jp/members/NEWS/200 40827/105151/?SS=imgview&FD=-195807635 59/69

### レイアウト考察

3次のトランス・インダクタの実現・イメージ図

今回二つのインダクタが共有する面積で結合係数が決まるものとする 実際には電磁界解析ツール等用いて実現できるか検証が必要



Dual-Band LNAの実装



1次側の面積に対し2次側の面積が占め る割合が6割なら結合係数はk=0.6

### レイアウト考察

3次のトランス・インダクタの実現・イメージ図

今回二つのインダクタが共有する面積で結合係数が決まるものとする 実際には電磁界解析ツール等用いて実現できるか検証が必要



#### **Triple-Band LNA**



提案回路2

今回Triple-Band LNAでは提案回路①または②を用いて

- ・ 共振周波数 f<sub>High</sub>は5~6GHzまで出すことを考える
- 面積についてもより小さくすることを考える

(1)と②の比較



### (1)と②の比較





#### **Triple-Band LNA**



#### Triple-Band LNA まとめ

- Triple-Band LNAを実現する回路を提案し解析した
- 理論値と理想素子での結果の値を一致させた
- 理想素子と実素子のFrequency Shift を設計時にどうするかという問題
- トランスは電磁界解析等を用いて実現できるか検証が必要
- レイアウトについてDual-Bandと比べあまり面積を大きくすることなくTriple-Bandを実現できるのではないかということを考察した
- ・ 提案回路①②を比較し②の構成をとれば面積を小さくより高周波に 対応できることを示した



アウトライン

- 研究目的
- Dual Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- Triple-Band LNA
  - 回路構成と原理
  - シミュレーション
- 考察

- インダクタ・トランスのレイアウト考察

• <u>まとめ</u>

#### まとめと今後の課題

まとめ

- 提案されていたDual-Band LNA理論をTriple-Bandに拡張した
- Triple-Band LNAもDual-Band LNAのように解析できることを示した

#### 今後の課題

- Dual, Triple-Bandともに実際の共振周波数は理論値からずれる傾向がある 実際に実装するときにどのように狙った共振周波数で設計するかを考える
- インダクタ・トランスの電磁界解析を行い実際に実現できるか調べる

#### 発表時の質疑応答・意見等 No.1

①マルチバンド化による拡張はどれくらいまでできるのか?

- A. いくつとは具体的に言えないが、高次にするほどNFの劣化や整合がとれていない共振周波数が出て設計が難しいというデメリットがあることがわかるため、あまり高次にするのは良いことではないと感じ今回は2次から3次までで拡張を抑えている。
- ② 周波数のシフトはやはり実際には大きな問題となる(似たような意見多数)
   アドバイスとして後からチューニングする回路をつけたらどうかという意見
   A. 今後そういったものも課題として研究していきたい。

③P22の $L_1$ はミスではないか?

A. 資料のミスで実際は $L_1 = L_g + L_s$ である。

#### 発表時の質疑応答・意見等 No.2

④Triple-BandのK変動の実際の素子シミュを入れかえてと良くなるのは回路上 ではどういったことにあたるのかわからないといけない 入れかえて良くなっただけでは性質だけをみているだけである(感想)

全体的に周波数シフトや入れ換えなどの問題の理由や原因を知る必要がある モデル化等で原因を確かめた方が良いという意見が多かった